

ジャポニスム 2018 開会式における
河野外務大臣の挨拶
(於：ラ・ヴィレット)

ニッセン文化大臣，
ご参列の皆様，

日本国外務大臣の河野太郎です。大変多くの皆様にご臨席頂き有り難うございます。本来は安倍内閣総理大臣がお伺いする予定でしたが，先日日本で発生した記録的な豪雨災害への対応に陣頭指揮を取らなければならなくなったため，私が代理で参りました。

先程，このラ・ヴィレットの庭で，日仏の子供たちのサッカー交流をしているところを見てきましたが，フランスのワールド・カップ決勝進出，おめでとうございます。日本がベルギーに勝っていたら，日本対フランス戦があったのだらうと思うと，少し残念な気持ちです。

「ジャポニスム 2018」は，日仏友好 160 周年を記念して，この文化の都パリにて開催される今世紀最大の文化事業です。古くは縄文時代の土器の造形美や歌舞伎から，現代のアニメまで，日本の文化芸術がまるごとフランスにやって参ります。

フランスと日本の間には，実に独特な，心と心で結ばれた文化の長い歴史があります。19 世紀には，北斎をはじめとする絵師たちによる浮世絵が，フランスの芸術家達の創造力を掻き立てました。

20 世紀の初頭に駐日フランス大使を務め，劇作家，そして詩人でもあったポール・クローデルは，ジャポニスムの時代を評して，「日本は，フランスの芸術やフランスの文学にかなりの影響を及ぼした」，「(日本の)素晴らしい画家たちが，美の秘密は目に見えるすべてを表現することではなくて，余分なものは省いて肝心なものだけを描くことだということを私たちに教えてくれました」と述べています。

この詩人の大使の頭の中には、日本から影響を受けた芸術家の一人として、ヴァン・ゴッホがいたはずです。ジャポニズムの時代にフランスで活躍していたゴッホは「僕は日本人がそのすべての制作のうちにもっている極度の清潔を羨望する。決して冗漫なところもないし、性急なところもない。ああ、僕もまたいつかは、そんな具合に絵を描けるようにならねばならぬ」と記しています。

フランスで活躍した芸術家が日本文化に魅了されたのと同様かそれ以上に、多くの日本人が、モネや、ロダン、あるいはヴィクトル・ユーゴー、ドビュッシーなど、フランスの豊かな芸術家達に、現代に至るまで魅了され続けております。

特筆すべきことは、日本とフランスの最初の橋渡しをしたのが、文化であったということです。フランスと日本の両国民の心と心が、絵の色彩で、詩の韻律で結びつき、文化を通してお互いに高めあい、そして価値観を共有しました。自由、平等、博愛は、我が国がフランスとともに世界に広めるべき共通の価値観となっています。

トリコロールの理念を、ともに守り、ともに前進させて行く。それが今日の日本とフランスの関係です。明後日の革命記念日のパレードを、安倍総理に代わって参観させていただきます。フランス政府の招待に、日本を代表して御礼申し上げます。

今年は、日本が近代化に舵を切った明治維新の150周年でもあります。日本の近代の曙とともに出会った二つの魂が、響き合い、運命に導かれるように関係を深め、そして未来を切り開こうとしている。その姿の一端に、一人でも多くの方々に触れていただき、日本文化の粋をご堪能頂けることを祈念して、私の御挨拶とさせていただきます。ありがとうございました。